



# 入植者はクランベリーと出会い、どのように使いこなしてきたか？ ～北海道の場合、米国の場合～

道総研

林業試験場 森林環境部 樹木利用グループ 錦織正智

## ①北米の入植者がはじめたクランベリー栽培

アメリカ北東部では、先住民のインディアンが野生のクランベリーを薬や染料、ドライフルーツとして利用していました。新天地アメリカへ移り住んだ入植者も野生の果実を摘みました。19世紀になると新産業として栽培化がはじまり、現在、米国の果実の生産量は約40万吨(2019年度)です。



図1 イーstmン・ジョンソン作「ナンタケット島のクランベリーの収穫」(1880年)



写真1 現在の収穫風景  
※wikipediaより引用

## ②北海道にも自生しているクランベリー

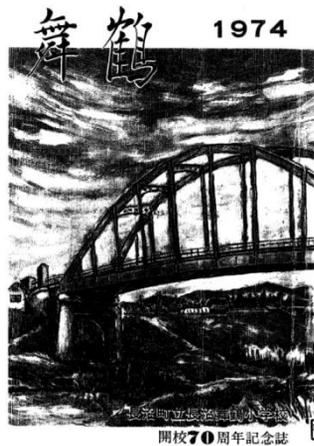
米国に自生するクランベリーの和名は、“オオミノツルコケモモ”。北海道や欧州を含む北半球の亜寒帯地域には、それよりも果実が小ぶりの近縁種“ツルコケモモ”が自生しています。この2種の果実が「クランベリー」と呼ばれます。両者とも自生地は湿地です。



写真2 本道のツルコケモモの自生地(左)と9月の果実(右)

## ③北海道における入植者とツルコケモモ(クランベリー)の関係

樺太南部に居住していたアイヌ民族は、ツルコケモモを「フレップ」と呼び、魚の臭み消しとして鮭料理などに使いました。他方、道外からの入植者とツルコケモモの関りを記録した資料は数少ないものの、長沼町立長沼舞鶴小学校開校70年記念誌から、ツルコケモモを「ヌマボボ」と呼び、独自の食文化が発達していたことが分かります。しかし、戦後になると、自生地(湿地)は、食料を増産するために農地へ転用されました。そして、昭和30年代に入ると、ツルコケモモを採ることは過去のことになりました。



舞鶴で生活した人にとって忘れることのできない、昔懐かしいヌマボボは、ツツジ科、常緑の小低木で和名をツルコケモモと言ひ、古くは石狩平野の湿地に何か所も群生していた。  
五月から六月にかけて、茎の先に淡いピンクの花をつけ、お盆を過ぎるころから果実は色づきはじめる。  
球形の果実は、大きいもので直径一センチメートルになる。ヌマボボ採りは、子どもばかりでなく、大人にとっても欠かせない年中行事で、時期が来ると一斉にヌマボボ採りに出掛けた。甘酸っぱい実は、生で食べたり、大量に採ったものを樽に何本も漬けて、梅漬けのかわりに食べた。小学生の遠足はもちろんのこと、家じゅうが揃ってヌマボボを採りに行くこともあれば、伝え聞いて遠くから馬車で来る人さえいた。

図2 長沼町立長沼舞鶴小学校開校70年記念誌の抜粋

## ④道産クランベリー栽培を目指す

土地利用に起因する湿地の荒廃と減少は北海道に限らず世界的な課題です。湿地に自生するクランベリー資源の保全と持続的な利用を目的として、欧州では栽培化の研究が進められています。林業試験場においても、北海道に残されたツルコケモモをハスカップに続く道産ベリーと捉えて、栽培化に向けたの技術開発に取り組みました。この結果、苗木生産から栽培、果実の収穫に至る一連の基礎技術を確立しました。



①苗木生産



②露地栽培



③結実



④収穫

写真3 苗木生産から果実の収穫に至る過程